

私学の魂

目白研心中学校・高等学校

“世界水準の” グローバル教育のもと
自分の意思で選択し、未来を切り拓く力を育て
自己決定力と自己肯定感を高めることで
この地球の未来に適応できる人へ。

新宿区中落合の高台の静かな住宅地。西武新宿線・都営地下鉄大江戸線「中井駅」から徒歩8分の交通至便の立地に、併設の目白大学と自然豊かなキャンパスを共有する目白研心中学校・高等学校。以前から「英語の目白」といわれるほど定評のあった女子校、旧・目白学園中学・高等学校の英語教育のノウハウと実績を受け継ぎ、11年前の共学化と同時に現在の校名に改め、「ACEプログラム」や「SECコース」の導入をさらなる契機に、年々本格的なグローバル教育にシフトしてきました。その改革の歩みを着任から8年の間リードしてきた校長の松下秀房先生と、英語科教員として英語教育とグローバル教育の進化を中心に担い、現在は教頭を務める吉田直子先生に、今回はお話を伺いました。



校長の松下秀房先生



教頭の吉田直子先生

DATA

1

目白研心中学校・高等学校

沿革	1923 (大正 12) 年	佐藤重遠・フユ先生により研心学園創立。
	1948 (昭和 23) 年	目白女子商業学校を目白学園中学校と目白学園高等学校に改める。
	1963 (昭和 38) 年	目白学園女子短期大学を開学。
	1983 (昭和 58) 年	総合図書館・講堂・体育館を要する佐藤重遠記念館を建設。
	1994 (平成 6) 年	目白大学を開学。
	1998 (平成 10) 年	1階にホール、2階に研修室を備えた研心館を建設。
	2002 (平成 14) 年	中学校は全クラス ACE プログラム (英語で英語を教える) に移行。文部科学省から英語教育の研究校スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールに指定される。
	2009 (平成 21) 年	男女共学の目白研心中学校・高等学校に改称。中学校・高等学校新校舎完成。
	2013 (平成 25) 年	創立 90 周年を迎える。
	2018 (平成 30) 年	中学入試に「英語スピーチ入試」を新設。
	2019 (平成 31) 年	中学入試に「次世代スキル入試」を新設。

校長 松下 秀房

所在地 〒161-8522 東京都新宿区中落合 4-31-1
TEL : 03-5996-3133 (代表)
<https://mk.mejiro.ac.jp/>

交通 西武新宿線・都営大江戸線「中井駅」より徒歩8分。都営大江戸線「落合南長崎駅」より徒歩10分。
東京メトロ東西線「落合駅」より徒歩12分。

本格的なグローバル教育へのシフトの きっかけと自信に結び着いた、 ACEプログラムとSECコース導入

校長の松下秀房先生は、この目白研心中学校・高等学校に着任して今年で8年目を迎えました。長らく私立男子校の教員・教頭・校長を務めてきた松下先生が目白研心に来てからの歩みは、2009（平成21）年に共学化して校名も変更、中高新校舎も完成して4年目を迎えてから現在までの「改革期」の歩みでもありました。

目白研心が、「ACE（Active Communication in English）プログラム」という、ネイティブ教員によるオールイングリッシュの「英語で英語を教える」授業を中学校の全クラスに導入したのが2002（平成14）年。同年には文部科学省から、当時「Selhi（スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール）」と呼ばれた英語教育の研究校に指定されました。

「このACEプログラムの導入が、それまでも定評のあった本校の英語教育を、さらに進化させるきっかけになりました。クラスを2分割して、海外の英語テキスト『Time Zone』を使ったネイティブ教員による少人数（10～15人）授業や、体験型の英語学習、留学生との交流、海外文化の紹介など「英語を使う」様々な機会が、有機的に生徒の英語力を伸ばすことに結びついたと思っています」と松下先生。

英語科で同校の女子校時代から英語教育に携わり、現在は教頭の吉田直子先生も、この数年の目白研心の生徒の「英語力の伸び」に確かな手応えを感じています。

「2014（平成26）年度の中3から導入した『SEC（Super English Course）』の学びが、学校全体の英語教育とグローバル教育の進化にはずみをつけました。海外大学や、スーパーグローバル大学など英語で講義が行

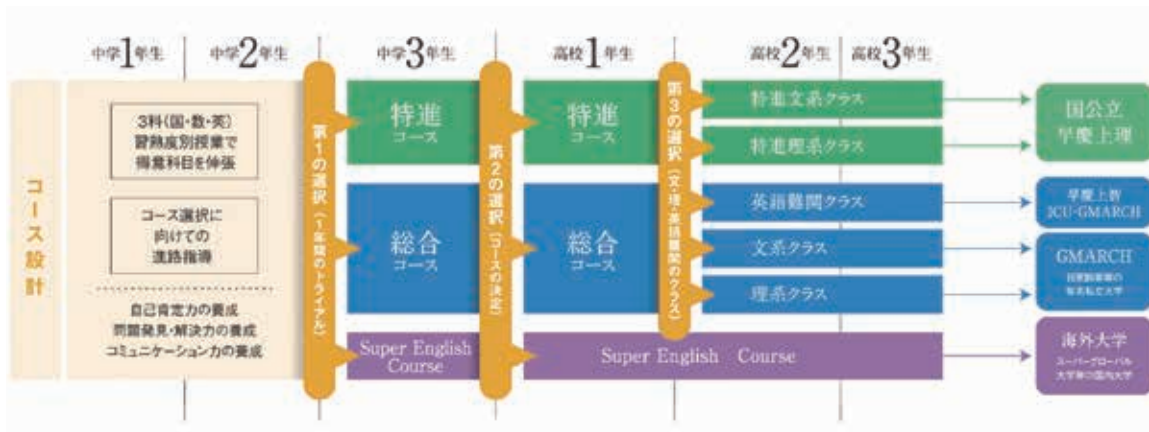


われる国内の難関大学への進学を目標として、海外大学受験レベルの「TOEFL iBT80点（PBT550点）」の力をつけることをめざすコースです。中学3年から一定以上の英語力と意欲を持つ生徒は選択できますが、高校からの入学希望者は英検だと準2級取得が受験資格になっています」と吉田先生。

この「SEC」コースの学びは、iPadを使った参加型授業、多彩な科目で包括的なグローバルコミュニケーション力をつける学び、高2で70日間のニュージーランドへの留学など、いま日本の教育に「世界水準の」教育への必要性が叫ばれる以前から、本格的なグローバル教育を先取りして実現したのになっています。

「海外の大学では必須のエッセイを書く力をつける『アカデミック・ライティング』や、プレゼンテーション、ディベート、グループワークなどの学びによって、海外大学への進学に必要な力を身につけることができます。その成果も、たとえば今春には海外大学へ最終的に5名が合格するなど、目に見えて現れてきました」と松下先生は、その手応えを話してくれました。

そして目白研心では、この「SECコース」の導入以前に、中学3年次から「特進コース」と「総合コース」という2つのコースを導入しており、中高一貫生は、





目白研心では、主体的に楽しく学ぶなかで、コミュニケーション力、問題発見・解決力、自己肯定力を高められる！

「SEC コース」を加えた3つのコースの中から、各自の進路目標や希望によって選択することができます。

さらに高校2年次からは、「特進コース」が「特進文系クラス」と「特進理系クラス」に分かれ、「総合コース」が「英語難関クラス」、「文系クラス」、「理系クラス」と別れるなかで、多様な選択が可能になります。このコース制の導入によって、多様な志向を持つ生徒の希望を広くかなえることのできる教育体制が整いました。

目白研心が育てる3つの力。 コミュニケーション力、問題発見・ 解決力、そして大切な自己肯定力

目白研心では、『学校案内』の冒頭に、「この地球の未来に適応できる人へ。」と謳っています。環境変化の激しい未来の世界で求められる力。それが『変わり続ける時代に適応できる力』だと定義づけ、「Adapt to the times」というコンセプトを掲げています。

先の「ACE プログラム」や「SEC コースの導入」を契機に、「未来に先駆けたグローバル人材育成の新たな取り組み」を本格的にスタートしている目白研心。それはつまり、そうした力を育てる教育への変化のために打ち出された、2020年度からの大学入試改革にも十分に対応できる力に他なりません。

「今年度の『学校案内』やポスターにも使っているキリンのイラストは、時代と環境の変化に適応して進化したキリンと、生徒の成長を重ねてイメージ化したものです」と松下先生は説明してくれました。

目白研心では、こうしたグローバル時代に不可欠な力として、①「世界中の人々と最適な関係を築くコミュニケーション力」②「正解のない問題」に対応できる問題発見・解決力③「成功体験が自信につながる自己肯定力」という「3つの力」を挙げています。

「最初の2つは、最近では良く言われていることです。

加えて本校では3つ目の『自己肯定力』を大切にしたいと考えています。この自己肯定感を高めることができれば、自ずとコミュニケーション力や表現力、積極性や行動力、学習へのモチベーションも高まってきますよね」と松下先生はその点を強調します。

この2～3年の間に、文部科学省が導入を推進している「IB（国際バカロレア）プログラム」の導入校や、海外の高校と日本の高校の両方の卒業資格が取得できる「ダブルディプロマ」プログラムの導入校など“世界水準の”学びの手法を導入する学校が、国公私立の中高でも増えてきましたが、目白研心では、それ以前から、そうしたグローバル教育の土台をオリジナルでつくりあげ、それをこの2～3年でさらに急速に本格化してきたこととなります。

そうした“世界水準の学びを、いつでもどこでも”と謳う目白研心では、先の「ACE プログラム」や「SEC コース」の導入、英語力を武器に早慶上智、GMARCHなどの文系難関私立大をめざす「英語難関クラス」の設置など「Local な学び（校内で磨く）」の一方で、中3のカナダ修学旅行、中3～高2の希望者で春休みに行うオーストラリア語学研修、これまでに約350名の先輩たちが留学を果たした目白研心伝統の、世界10校の中から留学先を選択できる、3か月または1年間の留学プログラムなど、「Global な学び（現地で高める）」の体験プログラムによって、“世界水準の”学びに触れる数多くの機会を設けています。

「中学3年生全員で行くカナダ修学旅行は、もう20年ほど前から続けてきました。これが本校の生徒の英語学習のモチベーションを高めることにつながっています」と吉田先生。「とにかく在学中に一度は、パスポートと外貨を持って、実際に海外に出かけていく体験をさせたいという考え方です」と松下先生もいいます

さらに今年からは高2（SEC コース以外の生徒）の修学旅行を、それまでの九州から台湾に変更したことで、生徒自身が感じた刺激と学習へのモチベーションがいつも高まったといいます。

「実は『英語難関クラス』の生徒は、3年前から行先を台湾に変更していました。4泊5日の旅行なので、あまり遠方ではなく、国際性も豊かでグローバル市場を見据え、しかも親日で治安が良く、温かく迎えて入れてくれる国として台湾を選んだのですが、この体験がとても大きかったです。

台湾で交流した学校は英語の授業レベルも高いのですが、生徒は決して流暢な発音ではなくても、英語を話そうとする意欲が非常に高く、本校の生徒はその姿勢に刺激をうけたようです。また、非常によく勉強する学校で、朝の7時半から夕刻17時まで、1日8時間授業を行っ

ていました。両親共働きの家庭が多いので、親が出勤する時間には、子どもが学校に行ってくれた方が安心なのだそうです。日本の学校は15時過ぎに授業が終わると伝え、『そんなに早く学校が終わって何してるの?』と聞かれました。『部活動などがあります』と説明しましたが、台湾の学校では週2回、授業時間に組み込む形であるそうです。

自身と同世代の海外の生徒たちが、どのような意欲や姿勢で英語学習や国際交流に臨んでいるかを肌で体験することで、自分たちもやらないと…、という意識が高まったようです」と吉田先生

「そのほかにも現地では、グローバル企業を見学したり、生徒が刺激を受ける機会が数多くあったようです」と松下先生も、その手応えを喜んでいきます。

生徒の主体的な学びの場となった、明るく機能的な「学習支援センター」が、大学合格実績の伸長を後押し

先の「海外大学へ5名合格（6月に1名合格）」をはじめ、今春は、国公立大学や早慶上智からGMARCH、日東駒専、中堅有力私大まで、大学への合格実績が増えました。

「大学受験の実績が上がった理由のひとつとしては、本校独自の、校内の『学習支援センター』の存在と効果が大きかったですね」と松下先生はいいます。

同校の「学習支援センター」とは、校舎に入るピロティのすぐ右奥の、入り口から最も近くで目立つ位置に、ガラス貼りでの様子も見られるような、明るくオープンな作りで設計されています。

ここでは、①弱点は翌日に積み残さない「基礎力定着プログラム」、②予備校に行く必要のない「ステップアッププログラム」、③クラブ活動との両立ができる「夜8時まで学校で勉強できる体制」、④国公立・早慶上智・GMARCHを志望する場合の志望校別対策講座（個別指導）は「学校が半額補助」などの恵まれた学習支援・サポートを受けることができます。

「ただし、ここでの学習を強制しているわけではありません。あくまで生徒が主体的に、自主的に学ぶことのできる環境として、この『学習支援センター』を設置しました。それでも生徒の利用率は非常に高く、ここに来ると、互いがんばっている友達の姿にも励まされて、自然に集中力を高めることができます。センターの奥には高校生用の個別ブースもありますが、手前の広いスペースは、基本的にオープンで、あまり堅苦しくない雰囲気が保てるようになっています。友達と話し合いながら学習している姿も良く見られます。これこそアク



校舎入り口からすぐの目立つ位置に設置された学習支援センター

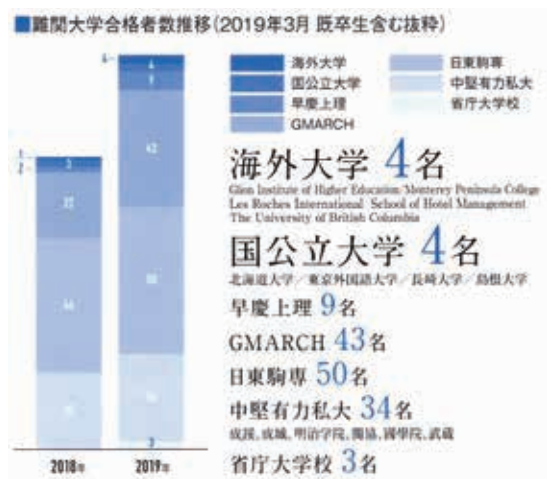
ティブラーニングですよ」と松下先生。

今春の卒業生のなかには、サッカー一部で高2まで活動を続け、予備校には1日も行かずに、この「学習支援センター」で自主的に学び続け、特進コースから慶應大学に現役で合格した男子生徒もいたといいます。

「大学1年生になったその卒業生が、いま学校に来て、チューターの一人として、後輩の面倒を見てくれているんです。そういう姿勢が嬉しいですし、その姿を在校生に見せられることの意味も大きいですよ。その彼は将来、国連の関係の仕事がしたいという想いから、そのために、まずグローバル企業をめざしているようです」と松下先生は目を細めます。

こうした自主学習の場が、学校からの強制ではなく、生徒の主体的な姿勢や意欲から盛んに利用されるようになったことが注目されます。

「自分から考え、実践する姿勢が身に着かないと、たとえ希望の大学に合格したとしても、その先に伸びていくのが難しいですよ。学校や教員が、手取り足取り宿





開設後もオープンスペースを広げてバージョンアップしている学習支援センターと松下先生。

題や補習で手厚く面倒を見ても、主体的な学習姿勢が育たないと意味がありません。『面倒見』という美名のもとで、本人の自己決定力を育てる教育ができていなかった面が、従来の日本の学校の反省点ではないかと思えます。ですから本校では、全員必修の補習や補講は一切ありません。講座はあっても、受講するかしないかは、すべて個々の生徒の自己決定によるものです」と松下先生は「自己決定力」を重視します。

「クラブ活動をしている生徒のために、中学生はクラブの終わる 18 時～19 時まで、高校生はクラブの終わる 18 時 30 分～20 時まで、この学習支援センターで学習することができます。地下にあるカフェテリアも 17 時まで開いていますので、おやつを買っておくこともできます。本校では『大学受験は団体戦』と言っていますが、雰囲気が良いクラスほど、受験でも強いように思います。また、不思議なことに、大学合格実績が伸びると同時に、クラブも強くなったりしています」と吉田



廊下や階段には在校生の作品が。こうした自己表現と作品の生徒間の共有が自己肯定感を育む。

先生は相乗効果を語ります。

「高校 3 年生の授業は 1 月までなのですが、2 月の大学入試の期間中にも登校して、この学習支援センターで勉強している生徒がいますね」と松下先生。

「この学習支援センターができ、サポート体制や環境を充実させてきた 3～4 年前から、明らかに生徒の意欲や学習姿勢など、学内の雰囲気が変わってきたように思います」と松下先生も吉田先生も口を揃えます。

『V トレーニング』と呼んでいるプリント学習のシステムでは、中 1 から高 3 のセンター試験レベルまで、5 教科で計 10 万枚のプリントが蓄積され、個々の生徒の課題に応じて、そのメニューに取り組むことができるようになっています」と吉田先生。

松下先生がその大事さを強調する「自分で考え、実践する」主体的な学習姿勢を育てるうえで、この学習支援センターが大きな役割を果たしているようです。

ひとつのブレイクスルーとなった、「英語スピーチ入試」と、「次世代スキル入試」の導入

目白研心中学校では、中学入試に昨春 2018 年から「英語スピーチ入試」を導入したことに続き、今春 2019 年からは「次世代スキル入試」という名称の「適性検査対応入試」を新設しました。

「それまでも中学入試で、英語の読み書きの筆記試験と国・算という形での英語入試は導入していたのですが、それだと何か本校が英語入試で求める力とは少し違うなと感じ、思い切って筆記を行わない『英語スピーチ入試』を導入したところ、大きな手応えを感じたのです。決して志願者は多くないものの、英語を話す力と意欲のある受験生を迎えることができました。帰国生入試と合わせて、その入試で入学してきた中 2 と中 1 の生徒 6～7 人のなかには、すでに非常に高い英語力を身に着けている生徒がいます。そういう生徒には、英語の取り出し授業も行っています。来年度からは『SEC コース』を希望する生徒もいます」と吉田先生。

「この『英語スピーチ入試』を導入したことも、本校にとっての転機になったように思います。国・算の筆記試験をしない形には、心配や反対する教員もいましたが、実際に行ってみると、とても個性的で、自己肯定感の高い生徒が入学してくれたのです」と松下先生。

一方、今春 2019 年に新設した「次世代スキル入試」は、同校が 2016 年度から授業にも導入している『エナジード』というプログラム・教材のエッセンスを使って、思考力や表現力を問う、ユニークなコンセプトの入試でしたが、まだ聞きなれない名称のためか、受験生の

理解が広がり切らなかった面がありました。そこで来春2020年入試では、名称を「適性検査対応型入試」と変更して、公立中高一貫校の「適性検査Ⅱ」に対応する筆記試験と、「適性検査Ⅰ」に対応する入試形式（与えられたテーマについてのグループワーク〈30分〉、個人ワーク〈50分〉、発表〈1人3分程度〉）で、思考力・判断力・表現力を問う形にするといいます。

「この入試で『AI・ロボットに代替えの効かない力』を試したいと考えています。ただ形式的にも公立中高一貫校、とくに近くの都立大泉中学校の『適性検査』の練習にもなる機会にと考えていますので、多くの小学生にチャレンジしてほしいですね」と松下先生。

目白研心の中学入試では、この2つのユニークな入試と、従来からの「2科・4科入試」の両方で、多様な受験生（＝小学生）と出会う機会を広げています。このほかにも、各入試で適用される3種類の「特待生制度」や、一般入試と特待特別入試に適用される「英語資格（英検・TOEFL Primary）」所持者に与えられる加点制度もありますので、受験生は「自分の強み」や「得意な科目や入試形式」を生かして、この目白研心中の入試にチャレンジしていくと良いでしょう。

海外からの留学生もさらに多く迎えて、居心地の良い環境で楽しく学べる「面白い学校」目白研心中高に！

そして目白研心では、昨年から校名を隠し文字にした「面白研心」というカラフルなロゴを表紙にした学校紹介リーフレットなどで、同校の中高6年間の楽しい学校生活の様子を伝えています。

「学校は学ぶ場であると同時に、生活する場でもあるという考え方で、生徒が居心地よく過ごせる環境を整えています。たとえば生徒が使うトイレもすべてウォッシュレット付きで、3基あるエレベーターは生徒が使うのも



「SECコース」の教室は、少人数制授業に適したアクティブラーニング空間で大型モニターも装備。iPadを使った学びも！



生物の進化と生徒の成長をイメージしたキリンのイラストを表紙にした『学校案内』と、「面白研心」のロゴを表紙にした学校生活の紹介リーフレット。

自由です。いまは生徒の家庭だって、きれいで居心地よくなっていますよね」と松下先生。

目白研心では、2009（平成21）年の男女共学化、校名変更と同時に新校舎が完成して以来、数年の間に少しずつではありますが、校舎や設備、教育環境をリニューアルしてきました。

「この夏には、全館にWiFiを完備しました。現在は、「SECコース」の生徒だけが全員iPadを使った授業をしていますが、2年後には中高生全員が、そうしたICT機器を活用した授業ができるよう、教員も研修を重ねています。本校では、『英語はツール』と位置付けて、英語教育から本格的なグローバル教育へと舵を切りましたが、ICT機器も、21世紀を生きる人間に必要なツールですからね」と松下先生はいいます。

生徒が居心地の良い環境で楽しく学ぶことができ、時代の変化にしなやかに適応する力を育てる。そんな中高6年間の環境を創造しようとしている目白研心。

「共学化から11年目を迎えて、女子校時代とはずいぶん雰囲気も変わってきました。男子が増えるごとに大きな声の挨拶が増え、女子の間でも礼節が良くなった印象です」と、女子校時代を知る吉田先生はいいます。

「以前は海外から目白研心の国際教育に期待して来日した留学者生も多くいました。ある時期から少し減っていたのですが、再度、そうした留学生の受け入れを増やしていきたいと考えています」と吉田先生。

「海外の中高生にも、日本に面白研心という面白い学校があり、留学してみたいと思ってもらえるような、そんな中高一貫校にしていきたいですね」と松下先生。

そうした「ダイバーシティ化」が実現すると、いっそう広い視野と高いモチベーションをもって主体的に学ぶ生徒の成長が期待できます。そんな同校の未来の姿が楽しみになってきました。